

— 1 —

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

※ 花岡沙弥はマレーシアから帰国し、日本の中学校に編入することになった。沙弥は編入して早々、図書委員の佐藤先輩から吟行（短歌を詠みに出かけること）のパートナーに指名される。出席番号が三十一番だったからという理由だけで指名されたことに最初は戸惑いを覚えるが、佐藤先輩との吟行を通じて、沙弥は初めて短歌を詠む楽しさを知り、パートナーを引き受けることにした。

「さーや、今日バスケット部見学に来る？」

翌週の木曜日、給食の時間。朋香ちゃんに言われるまですっかり忘れていた。そういえば誘われていたんだった。

「あ、えーっと。ごめん。今日はちょっと。」

「そっかあ、残念。」

転校生のわたしは、今月中に部活を決めることになっている。部活は強制じゃないけど、中二のほとんどは何かしらの部に入っているみたいだった。

「バスケット部って木曜日が活動日なんだっけ？」

「うん。週二回。月曜と木曜だよ。わりとゆるくて楽なんだ。」

ダメだ、吟行とダブってる。佐藤先輩との吟行は、毎週木曜日だ。

「何か、習い事があるの？」

「じゃ、ないんだけど……、木曜日はちょっと用事があつて。」

佐藤先輩と一緒に短歌を詠むことにしたの、なんて言えない。

だって、督促女王なんて変なあだ名つけられちゃうような人と仲よくしているなんて知られたくない。

そのとき、勢いよく扉が開いた。

振り返らなくても誰か分かる。

だって今日は木曜日。督促女王こと、佐藤先輩が登場する日だ。

一週間前とまったく同じシチュエーション。わたしはとつさに目をそらして、わかめごはんを一気にかき込む。顔が隠れるように、食器を斜めに傾けて。

来るな、来るな、話しかけないでよ。

わたしの願いははねのけられ、

「今日も三時半に図書室でね。」

佐藤先輩がわたしの横で立ち止まって言った。

わたしは、聞こえないふりをした。

「聞してる？ 三時半に出発するよ。」

この人は短歌は詠むくせに空気を読まない。

わたしは、チラリと顔を上げ、

「はい……。」

首をかがしているカメのようにひかえめにうなずいてみせた。

「どこに出発するんすかっ？」

オカモトくんが佐藤先輩にきいた。

「ヒミツ。」

にやつと笑った佐藤先輩が離れると、恐れていた事態がやってきた。

「さーや、今日、督促女王と何の約束してるの？」

「いや、とくに……。」

「でも、出発って言ってたよっ？」

「ああ、うん。なんていうか、まあ……。」

朋香ちゃんの顔に疑問の表情がうかぶ。

「だからバスケット部来られないのか。仲いいんだね。」

「そういうわけじゃないよ！」

わたしは、必死に首を横に振る。

朋香ちゃんを失いたくない。

佐藤先輩へのイライラが募る。

やめて、教室で話しかけないで。わたしまで変わり者だと思われちゃうから。

『無理やり連れていかれるだけなんだよ。ほんとに迷惑！』

そう言った瞬間、我に返った。

言いすぎた。

わたしがあわてて教室を見回すと、もう佐藤先輩はいなかった。

大丈夫。聞こえてない、よね。

（中略）

放課後、指定された時間に図書室に行くと、どこにも佐藤先輩の姿はなかった。

待ってみるけれど、三時四十五分になっても、四時になっても現れない。

「あの、督促……、佐藤先輩どこにいるか知りませんか？」

カウンターでパソコンに向かっていた司書の七海さんにきいてみた。

「さあ……今日は見てないね。明日の昼休みは図書委員の当番で来るけど。三年A組の教室のぞいてみたら？」

ああ分かりました、と答えたものの、ちょっと気が引けた。上の学年のクラスをのぞくのってすごく勇気がある。

図書室から出て、教室の扉にはまっている窓から佐藤先輩の姿を捜した。

いない。数人が窓際に集まって何かしゃべっているだけだった。

残念、かも。

わたしはいつの間にか吟行を楽しみにしていたみたいだ。

翌日の昼休み、佐藤先輩は図書室の書架の整頓をしていた。

「昨日、吟行するんじゃないですか？」

わたし、待ってたんですけど、ということのアピールするように、わたしは少し口をとがらせた。

「もう行かないよ。」

「え？」

「花岡さんと吟行はしない。」

佐藤先輩はわたしのほうを見ず、本の背ラベルに目を向けたまま言った。

「わたしといるところを見られるの、嫌なんですよ？」

ああ。

昨日の給食の時間、自分の口から飛び出た言葉を思い出す。

『無理やり連れていかれるだけなんだよ。ほんとに迷惑！』

あの言葉が聞こえていたなんて……。

わたし、サイテーだ。

「ごめんなさい。あの……。」

ちがうんです、と言おうとしたけれど、言えなかった。

何も、ちがわないじゃないか。

下級生からも変わり者扱いされている佐藤先輩と、仲よくしていることを周りに知られるのが嫌だった。

わたしまで変わり者のカテゴリーに入ってしまうと思ったから。

なのに、二人でいるときは仲よくしたいなんて、³□がいい。

佐藤先輩の気持ちなんて考えていなかった。

「わたし、周りから自分がどう呼ばれてるかなんて知ってるよ。いばって督促状^{とくそくじょう}を持ってくるから、督促女王。どの教室も、わたしが入っていくと嫌そうな顔をする。」

「わたしは……。」

「いいよ、自分の身を守りなよ。わたしとちがつて、中学生活まだまだ続くんだから。居心地^{いじこち}いい寢床^{ねど}は必要だよ。」

佐藤先輩はくちびるだけで微笑^{ほえ}んでいた。怖いと思った。だってそれは、本当の笑顔じゃないと分かったから。

昼休みだけじゃない、何かもつと大事なものの終わりのような予鈴^{よれい}が鳴る。

「それじゃあ。」

佐藤先輩はわたしの横をすり抜けた。

「じゃあ七海さん、戻りますね。」

「お疲れさま。今日はもう一人の当番の服部^{はつべ}さん来なかったわねえ。」

「来週はサボらないように言っておきます。」

佐藤先輩と七海さんのやり取りが耳に届く。

わたしも教室に戻らなくちゃ。でも、動けない。

そのとき、本棚^{ほんだ}に並んでいる一冊が目に留まった。

何だか懐かしさが胸に広がって、それがマレーシアの日本人学校の図書室で読んだ小説だと少し遅れて気がついた。

その本を見つめていると、

「あら、花岡さん。もう本鈴^{ほんれい}鳴るよ。教室戻って……っていうか、どうしたの？」

七海さんに声をかけられた。

「あ、えと、その。これ借りたくて。」

わたしはとっさにごまかし、人さし指をかけて本棚からその本を抜き出した。

この本を胸に抱えて目を閉じたら、マレーシアの日本人学校の図書室にワープできればいいのに。

そんなファンタジーの世界のようなことを考えたら、涙^{なみだ}が出てきた。

「この本、マレーシアで通った学校の図書室にもあったんです。わたし……マレーシアに帰りたい。」⁵

わたしは日本に帰ってきてから、周りの目ばかりを気にしている。

どうして。どうして。

わたしは悔しかった。

飛行機で運ばれる間に、自分の性格が変わってしまったような気がする。

マレーシアはいろんな民族がごっちゃに暮らしている多民族国家だ。

わたしは、マレーシアには東南アジア系の顔の人たちだけが住んでいると思っていた。でも、そうじゃなかった。

電車に乗っても、一つの車両にいろんな人たちがいた。

トウドウンと呼ばれるベールを被ったイスラム教徒^{きょうと}の女性たち。そのトウドウンはカラフルで、数人で身を寄せている後ろ姿は、きれいな羽の鳥たちみたいに見えた。

その前でおしゃべりしているのは、わたしたちとよく似た中華系^{ちゅうかけい}の人たち。(でも、髪型や服のセンスとか、どこか日本人とちがう。)

ドアに寄りかかっているのは、目のぼちりしたインド系のお兄さんたち。

マレーシア語も、英語も、どこの国か分からない言葉も混ぜこぜで聞こえてきた。

そんな車内から、窓の外の景色以上に目が離せなかった。

タブンカ、なんていう言葉はまだよく知らなかった。でも、一つハッキリ言えることは、わたしの気分がかなり上がったということ。

すごい、すごい、すごい。

暮らし始めると何を見ても新鮮^{しんせん}で、サイダーの泡^{あわ}みたいな刺激^{しげき}があった。

扉を完全に閉じる前に走りだしちゃうバス。

舗装^{はす}がボツボコのアスファルト。

屋台で売られているカエル肉の料理。

鼻にパンチを食らわすドリアンが山積みになった出店。

バツバツサと葉が生い茂るヤシの木たち。

大自然と都会が隣り合わせにあって、街の中心にはベトロナスツインタワーと呼ばれるトウモロコシみたいな形のビルがそびえ立つ。

蜘蛛^{くも}の巣^すみたいな大きなビビを窓ガラスに入れたまま走っている電車もあったつけ。

I、というのかな。

ここに来ることができてすごくラッキーだと思った。

みんなと同じものを持たなくちゃ、同じようなタイムで走らなきゃ、同じものをおいしいと思わなきゃ。

マレーシアに来る前のわたしはそんな思いにとらわれていた。それは四年生の後半あたりからわたしの胸に蜘蛛^{くも}の巣^すのように張りついてた。

でもここは、人とちがつていても仲間外れにされちゃうような場所じゃない。マレーシアで、わたしたち兄妹^{きょうだい}が入った日本人学校もそうだった。

インターナショナルスクールってガラじゃないよね、とか言ってお父さんとお母さんが決めた学校だったけれど、学年^{ねん}の隔^{へだ}てはなくて自由だった。一つ二つの歳^{とし}の差なんて気にせず、よく一緒に遊んでいた。

なのに、今のわたしといたら。

人とちがうことを怖がって、人とちがうことを否定して。

こんな自分、嫌だ。

「花岡さん。」

とん、とん。七海さんは横からわたしの背中を優しくたたき、

「その本、私も好きだよ。」

ほんわかした口調で言った。

「私が中学生のころに発行された本なの。主人公の女の子に、自分を重ねて読んでた。」

わたしはまじまじと七海さんの顔を見る。

大人の人の年齢^{ねんれい}がよく分からないけど、七海さんはまだお姉さんって呼べるくらいには若い。白い肌^{はだ}には少しソバ

カスがあって、赤いフレームの眼鏡の奥^{おく}の目がどんぐりみたいに丸くて茶色い。

それでも、この人が中学生のころって、きつと十年以上前の話だ。

「私は、昔から本が好きだったから、休みの日は一日中、自転車に乗って図書館^{とくしよかん}巡りをしてたの。たいていの図書館にその本は置いてあった。それがすごく心のよりどころになった。嫌なことや悲しいことがあって自分の心がグラグラ

になっても、その本は私が行く先々で、どこでも同じ凜^{りん}とした姿で図書館にある。それを見ると、安心して、私も自分の気持ちを立て直すことができたの。」

マレーシアの日本人学校の図書室にも、この中学校の図書室にも。遠く離れた場所でも、この本は変わらない……。

そういえば、マレーシアの日本人学校に編入したばかりのころ、日本でよく読んでいた本が図書室にそろっていて、何だかほっとしたつけ。

今はその逆だなんて笑ってしまう。

「佐藤さんね、編入してきたあなたのことを気にしてたよ。佐藤さんも転校生だったから、花岡さんの心配や緊張を和らげようとして、それで吟行^{ぎんぎょう}に誘ったんじゃないかな。ただ、不器用だから、あんな命令口調になってたけど、花岡

さんと仲よくなりたかったんだと思うよ。」

わたしと仲よくなろうと……？

もし、それが本当だったら。単に出席番号が三十一だからだけじゃないとしたら……。

わたしはひどいことを言ってしまった。

そう思ったとき、本鈴^{ほんれい}が鳴った。

「教室に戻れそう？」

8

4

3

2

1

0

-1

-2

-3

わたしはうなずいた。

教室に戻る途中、埃の転がる廊下を急ぎ足で進みながら考える。

9 佐藤先輩に謝らなきや。

(こまつあやこ「リマ・トウジュ・リマ・トウジュ・トウジュ」)

・ 督促：本文では図書館から借りた本を返すようながすこと。

・ 書架：本棚のこと。

問1 — 線1「とつさに」はどこにかかるか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 目を イ そらして ウ わかめごはんを エ 一気に オ かき込む

問2 — 線2「無理やり連れていかれるだけなんだよ。ほんととは迷惑！」とあるが、このように発言した「わたし」の状況はどのようなものか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア クラスの友達の前で配慮に欠けた態度を取り続ける佐藤先輩にいら立ち、つい本音を口にして気まずい空気を作り出してしまうほど我を忘れてしまっている。

イ クラスの友達から佐藤先輩との関係を追及されて困惑してしまい、これ以上追及されずにすむように心にもない嘘をついてこの場を取りつくりおうとしている。

ウ クラスの友達より佐藤先輩との約束を自分で優先させたものの、クラスに溶けこめなくなることを恐れるあまり、命令されたこととして友達に合わせようとしている。

エ 佐藤先輩と一緒にしかけることを楽しみにしていたが、クラスに打ち解けるためには佐藤先輩との関わりがないふりをしなければならず、そのことに罪の意識をいだいている。

オ 佐藤先輩に強制的に連れていかれる点を強調することでバスケットの見学を断った自分を正当化し、自分が変わり者であることを周囲に悟られないよう必死になっている。

問3 — 線3の□に入る漢字一字を答え、慣用句を完成させなさい。

問4 — 線4「佐藤先輩はくちびるだけで微笑んでいた」とあるが、このときの「佐藤先輩」について述べたものとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 沙弥が自分との吟行を迷惑だと言ったにもかかわらず、今は吟行を楽しみにしていたようなそぶりを見せていることに戸惑い、沙弥の言葉を信じられなくなっている。

イ 沙弥が自分の悪口を言うことでクラスに打ち解けようとしていることを理解し、編入生の沙弥が早く学校になじむことはいいことだと自分に言い聞かせている。

ウ 沙弥が本心から自分との吟行を迷惑に感じているかはわからないが、周囲の目を気にして自分のことを悪く言ったことにつかりしてしまい、沙弥のことを突き放している。

エ 沙弥が本心では自分との吟行を迷惑に感じており、直接打ち明けてくれなかったのは嫌われ者の自分を同情していたからだということがわかり、悲しみをこらえている。

オ 沙弥は自分のことを理解してくれる数少ない友人だと思っていたが、陰で自分の悪口を言っていることを知り、沙弥の本心にふれて怒りと憎しみがこみ上げている。

問5 — 線5「マレーシア」、6「日本」とあるが、本文において語られるマレーシアと日本の社会の違いについて

次のように述べた。 A D に入る最もふさわしい語を後にある語群からそれぞれ選び、記号で答えなさい(同じ記号を二度使ってはならない)。

A 性を B される日本の社会に対し、マレーシアの社会は C 性が D される。

【語群】

ア 異質 イ 強調 ウ 強要 エ 国際
オ 同質 カ 閉鎖 キ 保証 ク 容認

問6 — 線6 I に入る語として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 解放感 イ 克己心 ウ 最先端 エ 整然性 オ 絶対的

問7 — 線7「こんな自分、嫌だ」とあるが、「沙弥」にとつての理想のあり方が表現された部分を十字程度で本文中から抜き出し、そのはじめと終わりの三字をそれぞれ答えなさい。

問8 — 線8「単に出席番号が三十一だから」とあるが、なぜ「出席番号が三十一」だと佐藤先輩に選ばれることになるのか。簡潔に答えなさい。

問9 — 線9「佐藤先輩に謝らなきや」とあるが、このように発言する「わたし」の状況はどのようなものか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 周囲から孤立してしまうことを恐れて本来の自分を出せずにいたが、司書の七海の言葉によって自分のあるべき姿を取り戻し、佐藤先輩からの信頼を回復しようとしている。

イ 周囲からの圧力に負けて佐藤先輩に冷たくしてしまったことを後悔し気持ちが沈んでいたが、司書の七海に励まされ、そうした圧力に反抗するため立ち上がりようとしている。

ウ 周囲になじみたいという気持ちと佐藤先輩と仲良くしたいという気持ちの間でゆれていたが、司書の七海との会話を通じて佐藤先輩の方を選ぼうと決意を固めている。

エ 周囲の声を信じこんで佐藤先輩につらく当たってしまったが、司書の七海と対話することで佐藤先輩の優しさに気づき、誤解していたことを謝罪しようとしている。

オ 周囲の目を気にして自分のやりたいことができずにいたが、司書の七海の励ましをきっかけに自分の気持ちと向き合う覚悟を決め、佐藤先輩との関係を築き直すようとしている。

問10 本文で主に描かれていることとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 一冊の本との出会いがもたらした少女の成長

イ 置かれた環境に影響を受けやすい少女の心の弱さ

ウ お互いを思いやる少女たちの心のすれ違い

エ 文化の壁を越えて結ばれる少女たちの友情

オ 級友と先輩どちらの友情を選ぶかでゆれる少女の葛藤

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

* エチオピアは、政治的な統制が強い国だ。自由で公正な選挙が行われているとはいいがたいし、表現の自由への圧力は日増しに強まっている。

テレビの地上波は、いまま国営の放送局だけだ。二〇一六年十月には、拡大する政府への抗議活動を抑えるために非常事態宣言が出された。デモ活動は全面的に禁止。数ヶ月間、携帯からのネット接続も遮断された。この国家の強権的な支配に比べれば、日本はまだ自由な国に思える。

ただし、国民が国家という制度をどれほど内面化しているかという点で考えると、逆の姿がみえてくる。国家支配が強力なエチオピアでも、日本のように整った戸籍や住民票は存在しない。

日本では、子どもが生まれると名前をきめて国に届け出ることがあたりまえになっている。エチオピアには、その仕組みがない。税金を徴収するための世帯主や事業主の登録は進んできたが、国は国民全員の出生や死亡の情報をほとんど把握していない。

当然ながら、親はすぐに子どもに名前をつける必要もない。両親や祖父母は、生まれた子どものことを、それぞれ好き勝手な名前と呼ぶこともある。

A おじいちゃんは、肌の色が黒くて南部の民族のようなので「ドウカモ」と呼び、お母さんは、そんな名前はいいからと「アジャイボ」と呼び、父親はまた別の名前です。といったように、複数の名前が同時に使われ続けることも、めずらしくない。

さらに地域によっては、成人ないし結婚した男女に、生まれたときの「幼名」とは別の名前がつけられる。人によって呼び方が違うこともあるし、自分で好きな名前を名乗ることもある。この成人名が「尊称」となるが、親族や友人などのあいだでは幼名も使われる。

「名前」は、その人のアイデンティティとイコールではない。むしろ、社会的な関係や状況に応じて呼び方が変わったり、同時に複数の併用されたりする。相手をどの名前と呼ぶかによって、その人との関係が示される。

そんなエチオピアの農村部でも、数年前から、若い女性が中東などに家政婦として出稼ぎに行くようになり、パスポートを取得する人が出てきた。この国家が承認する身分証には、もちろんひとつの名前が必要になる。

ただ、正式な戸籍上の名前が存在しないので、そこでも柔軟な使い分けがなされる。たとえば、キリスト教徒がイスラムの国に出稼ぎに行くときには、ビザが下りやすいようにムスリム名でIDカードを村役場で出してもらい、そのIDの名前でパスポートを申請する。そんなことがあつうに行われている。

1 エチオピアでの「名前」は、単一の固定したものではない。「戸籍」というつねに参照される典拠がないので、個人の同一性にもつづいたパスポートなどの国家の制度も、するりと身をかわされてしまう。「名前」は、「わたし」という存在の外にあって、つねに操作可能なのだ。

B はくらは、幼いころからひとつの固定した名前を前提に育ってきた。テストの答案用紙や自分の持ち物、いろんな書類などに、出生後に親が国に届けたひとつの名前を繰り返し記入してきた。複数の名前を使いわけると、思いも寄らない。

この「記名」は、同時に、出生時に定められた「性別」を表明し続ける行為でもある。「わたし」の存在に「名前」が付随しているのではなく、国家に登録された「名前」が「わたし」のあり方を定め、かたちづくっていく。それが学校教育にしても、結婚にしても、固定した名前と性別にもとづく社会制度を可能にする。

C こうなつたのは明治期に戸籍制度が整えられて以降のことだ。それまでは、日本でも年齢に応じた名づけや自分の意志での改名がよく行われていた。それがいつの間にか、すっかり「名前」↓「わたし」になつた。

2 ひとりにひとつだけのきまつた名前がある。ひとつの名前が、その人の同一性を保証する。こうして、「わたし」は、つねに「わたし」であり続ける。個人の同一性と単一性。それが、国家が政策を遂行する基盤になる。

3 日本とエチオピア、はたしてどちらの国家のほうが「強力」なのだろうか。
エチオピアと日本の国のあり方にみえるねじれ。国家の「支配」とか、「権力」というと、
X 表向きの統制の強さだけが想起される。けれど、それは内面化／身体化の度合いと深く関わっている。その制度があたりまえであ

ばあるほど、国家が関与する密度は増す。
だから日本人が、エチオピア人よりも国家から自由であるとはいえない。戸籍にしても、他のいろんな制度にしても、日本人のほうがはるかに国家の存在を欠かすことのできない前提として生きている。そうやって国家と密着するのが「あたりまえ」になると、自由に息を吸うことがどんな感覚だったのかさえ忘れてしまう。

(松村圭一郎『うしろめたさの人類学』による)

- * エチオピア：東アフリカに位置する国家。
- * アイデンティティ：主体性。同一性。一個の人格。自分が何者かを表す要素。
- * ムスリム名：イスラム教徒としての名前。
- * IDカード：身分証明書。

問1 A、B、C に当てはまる言葉を次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

A または イ たとえば ウ もちろん エ それでは オ 一方

問2 X には「ある傾向が強い様子」を意味する言葉が入る。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

A つまるところ イ まれに ウ あくまで エ 存外 オ とかく

問3 線1「エチオピアでの『名前』は、単一の固定したものではない」とあるが、それではエチオピアにおける「名前」とはどのようなものであると言えるか。解答らんに合わせて、四十字以内で説明しなさい。「個人」という言葉を必ず用いること。ただし、句読点等の記号も一字として数える。また、あたえられた書き出しは字数にふくめない。

問4 線2「ひとりにひとつだけのきまつた名前がある。ひとつの名前が、その人の同一性を保証する」とあるが、なぜこのことが国家にとって重要なのか。その理由を四十字以内で説明しなさい。「仕組み」という言葉を必ず用いること。ただし、句読点等の記号も一字として数える。

問5 線3「日本とエチオピア、はたしてどちらの国家のほうが『強力』なのだろうか」とあるが、この問いに対する筆者の考えを八十字以内で説明しなさい。解答は以下に指定した二つの言葉を用い、エチオピアと日本を対比させること。ただし、句読点等の記号も一字として数える。また、指定した言葉を使用する順番は問わない。

表面的 あたりまえ

三 次の問いに答えなさい。

問1 次の文章の——線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。ただし、送り仮名の必要なものはひらがなで送り仮名をつけて答えること。

折口信夫は、若いころから釈迦空という特異な筆名で短歌を作り続け、特色ある詩や小説をも著した日本を代表する文学者の一人である。同時に、国文学や古代学で優れた業績を残した研究者でもあった。中でも生涯にわたっての目論見は、日本文学がどのようにタンジョウしたのかを明らかにすることであった。

折口は、全国にブンプする祭りから、老人から幼子、果ては鬼にいたるまで様々な姿で村にオトズレル神、「まれびと」を発見し、それが村人に与える祝福のことは、「呪言」が文学発生の母胎となったのだと考えた。いわば、シキンセキとして生活にウラウチされた文学の信仰起源説を掲げたのである。

しかし、折口には金輪際他言無用とでもいふべき出来事が、若いころの恋に秘められていたのであった。

問2 次の例のように、①―③で示された意味を表すことばをひらがなで答えなさい。

(例) ・囲碁、将棋などで先の手を考える ・顔色から気持ちを考える ・詩歌を作る

答え よむ

- | | | | |
|---|-----------|--------------|------------|
| ① | ・鑑定する | ・世話をする | ・ためす |
| ② | ・出発する | ・続けていたことを止める | ・服の生地などを切る |
| ③ | ・強い感動を与える | ・芝居を興行する | ・文字などを入力する |

〔以下 余 白〕